
携帯電話のlast day

Liz × 菖月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

携帯電話のlast day

【Zコード】

N9129V

【作者名】

Liz × 蒲月

【あらすじ】

今日で変えられてしまつとある携帯電話の最終日、それは携帯電話にとって最大のビッグイベントだった。

目を開ければ、そこは何も見えない暗闇の世界だった。これで一体何回目だろうか。

「お願い……あたしを捨てないで……」

女の声が遠くの方で微かに聞こえる。声は徐々に大きくなる。

「誰？」

自分の声が^{じだま}として聞こえる。

「お願^ねい……あたしを……あたしを捨てないで」

「君は一体誰なの？ 何回も俺を此処に連れているのは君なの？」

「そう。あなたに言いたい事があるの。あなたが今使っている携帯電話をこれからも長く大切に使って欲しいの」

「俺の携帯電話……を？」

「そう。あなたは唯^ひ・唯^ひ携帯電話を長く使ってくれればいいの」「携帯電話つて……携帯電話に何かあるのか！？」

「じゃないとあたしはもう終わりなの……だから……だから……」

徐々に女の声が小さくなつていいく。

「終わりって……どういう事だよ……せめて正体だけでも見せてくれつ

……

ガタン

急に無重力が無くなり、俺はいつものように落ちていく。

「おい、答えるおおおおおお……！」

「はっ」

目を開ければいつも変わらない俺の部屋の天井が映っていた。

「クソ……また夢かよ。一体何なんだあいは」

毎回俺は謎の女の夢を見る。内容は今日解った事で携帯電話を長

く大切に使えていい事。しかもいつも肝心の正体を見せろといつ所で落下というパターンで夢は終わる。

「携帯電話って何なんだよ。何かの呪い?」

机に置いてある、傷だらけのスライド式携帯電話を手に取る。

「親に相談してみよつ」

枕の横に置いてあるスライド式携帯電話をポケットに入れ、一階のリビングへと入る。

「あら、おはよう」

「おはよつ。ねえ母さん、最近変な夢ばつか見るんだけどさ」

「変な夢? 勉強で疲れてるんじやない? もうとそのせいよ」

「そうかなあ……」

「そうよ。さつ、早くご飯を食べて」

母親はキッチンで俺の弁当を作りながら言つ。テーブルには、ご飯、みそ汁、目玉焼きそしてコップには麦茶を注がれていた。俺はいつも通りお茶を一杯飲んで食べる。

急いで支度をし、リュックを背負つて玄関を出る。

「じゃ、いつてきまゝす

「いつてらつしゃい」

「ひつして高校三年生、氷野湖斐沢の何氣ない一日が始まる。学校に着いて、授業を聞いて、友達と昼飯食つて、放課後は一時間受験勉強をして帰る。いつも通りの学校生活を終え、俺は帰宅する。いつもは真っ直ぐ家へ帰る予定だったが、今日は何故か携帯ショットへ寄りたかった。いつも帰る道を外れ、1km程進んだ先に携帯ショットがある。俺の携帯電話は今月で確か3年半。自分でもよく使つてると思つ。しかし流石にそれ程長く使つているといろいろ不便な点が出てくる。充電は一日あまり使つていなくても半分程度になるし、稀に勝手にシャットダウンする。一番嫌なのはボタンが押しづらくなつた事。強く押しても反応しない時があるから度々苛立つ。親に何度も「携帯変えよつ」と言つが答えはNO。壊れたら変えるという意味解らない事を言つから本当に困る。クラスの皆を見

ればスマートフォンや新種の携帯電話ばかり。クラスの中でも3年半も使っているのはせいぜい俺ぐらいだろう。

「いらっしゃいませ」

店内に入り、早速新種の携帯電話へと向かつ。今流行のスマートフォンや今人気急上昇中のノーテン。この携帯電話は懶々充電する必要が無く、予めコンセントに充電器を差しておくと、外出中突然携帯電話の電池が切れそうになつたら勝手に充電してくれるという携帯電話が今流行つてゐる。他のを見ても若干古いはあるが、俺の携帯電話よりは確実に新しいだろう。

「一番安いのでも一万円か。変えたいけど多分二〇〇って言われるだろうな」

店内をぐるっと回り、入口に置いてあるカタログだけ貰つて出た。歩きながらカタログを開くと、どれも欲しくなる。

「早く買い替えたいなあ」

斐沢はその言葉がなかなか頭から離れなかつた。

家に着き、一階の自室へと入つた。私服に着替え、椅子の背せもた凭れによつかりながら携帯電話を見つめる。よく見れば、剥げている箇所が所々ある。

「本当にぶつ壊れるまでは母さんはえてくれないのかなあ」

携帯電話を机に置き、一人カタログを見ていた。

「げつ、もうこんな時間？」

時計を見ればあれから一時間俺はカタログを見ていた。受験生だから勉強しないとと思ったが今日に限つてやる気が出ない。時間的にご飯だし。ご飯食べてから勉強しようと斐沢は部屋を出た。すると、斐沢の部屋に一機携帯電話が置かれたのを確認し、窓を通りぬけてきたのは神様と言つていいのか分からないがそれっぽい人が入り、斐沢の携帯電話を取る。

「ほれ。出て」
「ふー」

「きやつー。」

神様が携帯電話に向かつて一息吹くと、携帯電話からオレンジの粉が落ちる事無く浮遊状態を保ちながら出てきた。

「お主、何か悩みがあるじやろ?」

「あなたは…」

「わしは自分で言つのもなんじやが、一応神様じや」

「か…神様!？」

「そんなに驚くんじやない。お主、携帯電話主（おも）に何かさせとおるじやろ?」

「は、はい…あたしを捨てないでつて毎日のように夢の中でも言つて
います」

「ほあー。どうしてそんなに捨てられたくないんじや?」

「だつて…あたしは次捨てられたらもう携帯電話として役目を終え
てしまうかもしないからです。あたし達はせいぜい3回変えられ
たら次はもうないに等しい。あたしはもうこれで3回目です。1、
2回目は眞面に大事に使つてくれなかつた。けど今回は斐沢（あいざわ）が携帯
電話をこんなに長く、そして大切に使つてくれました。もう寿命は
そんなに無いかもしないけど、一日でも長くご主人様と一緒にい
たい。けどご主人様は携帯電話を変えたくてしようがない。だから
あたしはそれを阻止するためにこうして訴えてるんです」

「なるほどな。じゃあお主は変えられたくない訳じやな?」

「まあ、はい」

「じゃあこれははどうだ。明日一日だけお主を人間にさせ、「ご主人様
に今までの感謝を伝えるつていつのはどうじや?」

「あたしが…ご主人様と話す?」

「そうじや。携帯電話のまんまじや伝わらざ」に終わつてしまつじや
る?お主だつて今までの感謝を伝えたいんじやる?」

「は、はい…」

「ならそれを明日叶えさせてやる。じゃが条件付きでな

「じょ、条件…」

「条件は一つ。お主は明日で終わるのじゃ」

「明日で…終わる?」

「そう。つまり明日でお主といひ主人様との関係は終わりといつ事じや」

「そ、そんな!」

「嫌ならしい。感謝を伝えれないまま壊れるまで使われるといつのでもいいぞ?」

女は暫く考える。

「お…お願ひします!」

「本当にいいんじゃな?」

「はい」

「分かった。じゃあ明日ご主人様が起きてからスタートじゃ」

そう言うと神様は一瞬で消えてしまった。同時に女も携帯電話の中に入った。

ガチャ

直後に斐沢がコップを持ちながら入ってきた。コップを机に置き、カタログを取り出す。

「まさか、あの母さんが変えていいなんて言つなんて信じられない。あれ程ダメって言ったのに」

(神様の言う通りだ。あたしは明日で終わりになつてゐる)

携帯電話の奥深くで女は驚く。勿論女の声は斐沢に届く訳がない。

「携帯は後で決めよう。さてさて勉強しなくちゃ」

斐沢は参考書を取り出し、取り掛かる。

翌日午前8時。カーテンの隙間から漏れる光が部屋を明るくする。

今日は土曜日、勿論学校は休みだ。

(今日であたしは終わるのね)

携帯電話の待ち受け画面から見える斐沢の部屋の天井。これを見るのも今日が最後だ。

「ん？」

斐沢のかいさの声が聞こえたと同時にあたしにとつて最大の日が始まる。

ピカーン

突如オレンジの光が女を包む。それは斐沢から見れば携帯電話がオレンジ色に光つてゐる様に見えた。しかし斐沢は携帯電話と反対側を向いている為気付いていない。光は女を浮かばせ、待ち受け画面へと移動させる。そして待ち受け画面に手が触れた時、光は更に強くなり、視界が一気に眩しくなつた。目が開けられる程になつた時、女はゆっくりと目を開けるとそこはいつも見る天井では無く、斐沢がこつちを見て驚いていた。目の前にいたのはオレンジ色の長い髪をした、やや細い体型の女性だつた。

「アツ…アツ…」

斐沢は口を開いたまま唯驚いていた。

「ご主人様……」

「……へつ？」

「あたし、誰だか分かります？」

斐沢は顔を横に振る。

「あたしは……ご主人の携帯電話です」

「お……俺の携帯、電話？」

時間が経つにつれ、落ち着いてきた斐沢はやつと喋る事が出来た。「はい。今日はご主人様と一日一緒に居させてもらいます。宜しくお願ひします」

「お…おう。と、取り敢えずその……主人つて言つて止めてくれないか？結構違和感あるんだ。そ、そうだ！互いに呼び名を決めよう。まず君…いや、あなた…いや、ケータイ……」

「何でも良いですよ？ご主人様の好きな名前で」

「そう言われてもなあ。なんか人の様な名前が…」

斐沢は周りを見ると、本棚にあるバトル漫画で目が止まつた。そ

うだー漫画のキャラクターの名前にすればいいんだーでも何しよう。

暫く考えた末、漫画のキャラクターで斐沢の好きなキャラクターの名前が浮かんだ。

「そうだ！ナダメだ！」

「ナダメ…いい名前ですね。はい、分かりました！では『主人様について』は…」

「俺は普通に斐沢でいいよ」

「そ、そんなつ、『主人様を呼び捨てにするなんて』

「ナダメツ」

「は、はいっ！」

「俺の名は？」

「……か……かいぞ……」

「そう、これからそう呼んでくれよ？」「は…はい…」

ナダメは少し顔を赤くしながら答える。

「さて、早速だが一つ大きな問題がある」「な、何ですか？」

「携帯電話を操作出来ないって事だ」「……」

ナダメは自分の体を見て言葉を失ってしまった。確かに人間になつてしまつた携帯電話ではメールや電話が出来ない。

「ど、どうしましょ……」

「まあいい。一日位は見なくたつて生きていける

「そう言えば斐沢様、朝ごはんは？」

「斐沢様…なんかまだ違和感感じるけどいいのか。ああそう言えばそうだな。おまえは食わなくていいのか？」

「あたしは元は携帯電話なので充電で〇〇です。確か背中に差しこみする所があると思うのですが…」「どれどれ……」

ナダメは手で後ろに移動させ、差し込み口を探す。斐沢も一緒に探す。

「あ、あつあつた。ここだな。で、今は充電しなくてもいいのか？」

「斐沢様が寝る前に充電してくれたので大丈夫です」

「そつか。じゃあ俺は適当に飯食つてくるよ。ナダメはそこにいて」

「解りました」

斐沢は部屋を出る。一人になつたナダメは斐沢の部屋を見回つた。様々なグッズが置かれていた。中には10年前の雑誌が積み重ねてあつた。本棚には漫画があり、中には子供向けの漫画もあつた。本棚の上を見ると、自由研究のまとめである我が町の生態調査と書かれた模造紙が置いてあつた。模造紙を取り出すと、斐沢と一緒に小魚や水中生物が沢山入つている写真が貼られていた。机を見れば受験生とあつて多くの参考書が置かれていた。それぞれの表紙には有名な大学名が書いてあつた。ナダメは日頃斐沢が携帯電話で調べているので、よく知つていて。机に置いてある本を整理していると一冊のカタログが机の本棚から落ちてきた。

「これは……」

ナダメはカタログを手に取つた。確かこれは昨日斐沢様が貰つてきたカタログ。表紙を捲ると最新の機種がずらりと掲載されていた。「今のあたしよりも凄い機能が備わつて……やっぱりあたしはもう買いえないといけない時期なのかしら……」

ページを捲れば捲る程、自分は時代遅れなんだが思い知らされる。「やっぱりあたしはもう古いんだ……」

静かにカタログを閉じ、溜息を吐く。

「待つたか？」

斐沢がドアを開けて入つてきた。

「ううん。全然待つてないよ」

ナダメは笑顔で返しながら背後でカタログを机に置く。

「そつか。じゃあこれからどうする？俺はずつと勉強するけど……」

「斐沢様が勉強するならそれでいいですよ。あたしはずっと『斐沢様が勉強するならそれでいいですよ』とおもってますから」

「そつか。言いたい事があつたらいつでも言えよ」

「はい」

ナダメはベッドに座る。斐沢も椅子に座り、参考書を開く。その時は空は少し雲が目立っていた。

午後0時。

「う～、もうこんな時間か」

数秒背伸びし、参考書を閉じる。

「なあ、ナダメ！ 午後はどうか行かねえか？」

「へつー？」

突然の事に驚くナダメ。

「で、でも斐沢様、そんな事をしてもいいのですかー？」

「なんですか？」

「だつていつも斐沢様は午後勉強をしているじゃないですかー！ しかも受験生では……」

「堅苦しいなあナダメー。今日は夕方まで両親が仕事でいないんだ。偶には数時間位遊んだつていいだろ？」

「それはいけません！ 總ら何でも斐沢様それは……」

「別にいいだろー！ ナダメは真面目過ぎるんだよ。それに今日はおまえと遊びてえしな」

「そ……」

叱りづとしていていたナダメだつたが、斐沢の発言に言葉を失つた。

「あたしと……ですか？」

「そうさ。だつて今日だけなんだろ？ 」 つしていられるのは。折角自由になれたんだ。行きたいとこ言えよ

「そ、そんな急に…」

ナダメの顔は一気に真っ赤になつた。

「まあ昼飯食つてゐる間に考えておけよ」

ガチャ

「どうしよう……」

ナダメは暫く顔を真っ赤にしていた。外は太陽が雲に隠れようとしていた。

「どうだ？ 行きたいとこ決まつたか？」

「はい！ 決まりました」

ナダメは笑顔で答える。

「陵羽士はどうでしようか？」

「陵羽士！ ？ あそこ工場ばつかしかねえぞ？」

「あたしにとつては思い出の場所なんですよ」

「そつか。ナダメが言うなら仕方ないか」

「一人は部屋を出て、家を出る。

「ちょっと曇つてゐな。雨降らなきやいいが…」

「外はどんよりと厚い雲が覆つていた。

「大丈夫です。あたしは雨で故障するような器械ではありませんから」

「そつか。じゃ、行こつか」

家を出て15分程にある最寄駅に乗つて1時間ちょっと。周辺が工場しかない陵羽士駅に一人は着いた。下車すると排気ガスの臭いが充満していた。

「久しぶり、この空氣」

「そうか？ ゴホッ、俺には結構苦しいんだが、ゴホッゴホッ」

「そうですか？ あたしには丁度良いですよ？ 苦しいなら他の場所にしますか？」

「いや、ナダメにとつて思い出の場所ならこれくらい我慢できる、ゴホツ、ゴホツ」

「無理しないで下さいよ。なんなら場所変えますか？」

「いや、いいよ。大丈夫だから」

「ほんとですか？」

「ああ、大丈夫だ。行こうぜ」

二人は歩道を歩く。道路には工場の町と言つのもあつて大型トラックが多く走っている。周りを見れば大手の会社の工場が数多く建てられていた。

暫く歩いていると、ナダメはある工場で止まった。

「懐かしい」

ナダメが止まった工場は他の工場よりも一回り小さい工場で、錆びていて仕切りの柵や建物の錆び具合が古さを感じる。ナダメは柵の隙間から覗くと、遠くに携帯電話が無残にも外に山積みされているのを見る。一緒に見ていた斐沢は尋ねる。

「ここに何か思い出があるのか？」

「はい。ここは……よくお世話になつてる工場です。あたしは斐沢様が購入される前はここで廃棄されました。あの山積みされた携帯電話の中にあたしはいました。ここでは使えなくなつた携帯電話を再利用し、新たな形でまた市場へと出るのです。しかし一部生まれ変われない物もいるんです。その物達は生まれ変わらずに処分されます。その処分されるラインって言つものがあるんです」

「ライン？」

「はい。そのラインはおよそ3回。3回再利用されたら次はないのです。あたしはこれで3回目。なので次は無く、処分です。だから斐沢様に買われる前、なるべく長く使って欲しい人に買って欲しかったのです。そうしたら運良く斐沢様に出会え、こうして今日まで斐沢様はあたしを使ってくれました。だいたいの人間つて1年半、

良くて2年で買い換えるんです。1、2回目は正しくその期間の間に変えられました。ちゃんと使ってくればそれ以上使えるのに入間たちは乱暴に使うから壊れやすいのです。そして今回もどうせあたしは乱暴に使われ、処分されるのだと思つていきました。最後くらい長く使って欲しかつたらあたしは毎晩斐沢様に声をかけました。

「じゃ、毎晩夢の中で言つてたのは…」

「はい、あたしです。でも唯一あたしが斐沢様と話せるのはこの時間しかないのです。迷惑かけてごめんなさい。けど今思えば斐沢様はあたしを3年半も使ってくれました。もうあたしはそれで十分です。だから

「え？」

ナダメは静かに斐沢の唇へと触れた。

「す、すみません。あたしこういうの言葉に言えないものですから…」

「そ…そつか」

斐沢は人生で初めてのキスに少々戸惑つていた。

「ねえ斐沢様…もう一つお願ひしてもいいですか？」

「な、何？」

「斐沢様は本日携帯電話を変えるんですよね？」

「あ、ああ……」

「なら話は早いです。携帯電話を変える際、あたしを……携帯電話

あたし
をちゃんと店に出してくださいね。斐沢様は物を捨てられない性格

ですよね？」

「何でそれを…」

「斐沢様がいない間に見つけちゃつたんです。10年前の雑誌を。

普通小学生の時に買った物、特に雑誌を捨てれないのはあたしの理論上、物を捨てられない性格である証です。あたし今の状態のままで生きていくのは嫌です。だったら皆と一緒に天国で会いたいです。だからちゃんとお店の人に出してくださいよ

「ナ…ナダメ…」

「今まで本当にありがとうございました。あたしは斐沢様に会えて嬉しかつた」

すると突然ナダメの体が光始めた。

「時間が来てしまったようですね。ちゃんと……出してくださいよ」
その言葉を最後に光はナダメを包んだ。光の塊となつたナダメは、ゆっくりと斐沢の胸の位置に移動する。斐沢は両手で光の下に置く。ゆっくりと光は斐沢の手元へと降り、光が一瞬で消えるといつも見るスライド式の携帯電話になっていた。斐沢は携帯電話を大事にポケットに入れた。その時空は今にも雨が降りそうだった。

ザアアアアアアアアア

電車を降りると外は大雨だつた。屋根に激しく雨粒が当たり、道路には水溜まりが出来ていた。

「どうしよう…夕立ならいいんだけど…」

夕立だと信じていた斐沢だが、駅内のテレビをたまたま見つけ、見てみると雨は今夜遅くまで降ると気象予報士が言つていた。

「マジかよ…こうなつたらっ」

斐沢は大雨の中走つていつた。大粒の雨が降る中、前面は僅か數十秒でびしょ濡れになつた。

「このまま家まで…うわっ！」

家まであと500メートルまで来た頃、足が凭れ、斐沢は濡れたアスファルト上で転ぶ。その際携帯電話がポケットから飛び出し、運悪く水溜まりに入つてしまつた。

「イテテテテ…どうしてこう転ぶかね…。あつ、俺の携帯電話…！」

斐沢はすぐさま携帯電話を水溜まりから取り出す。スライドすると待ち受け画面は表示された。

「良か…つた」

斐沢は立ち上がり、手に持つたまま家まで走る。

「おかえりなさい。あんた何処行つてたの！？」

家に入ると仕事から帰ってきた母さんが心配そうな声でリビングから出てきた。

「ちょっと買い物に行こうとしたら雨にあたつたから帰ったんだよ

「早くシャワー浴びていきなさい！風邪ひくわよ」

「へえい」

斐沢はシャワーで濡れて冷えた体を洗い流す。

体を洗い終え、着替えた斐沢はリビングに入る。

「斐沢、早く準備して」

「何で？」

「何どほけてんの？携帯電話買い変えるんでしょ？」

「ああそれ？それならまだいいよ。ぶつ壊れた時に買い変えるよ

「あら、あれ程変えたいって言つてた人が。どうしたの？」

「別に何でもねえよ。気分が変わったんだよ」

斐沢は部屋を出て、玄関に置いてある携帯電話を持つ。

「わるいが、まだまだ変えねえわ。壊れるまで宜しくな

斐沢は携帯電話をポケットに入れ、一階へと上がつていった。

(後書き)

感想・評価を宜しくお願いします。
もしかしたら投稿し直す場合があります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9129v/>

携帯電話のlast day

2011年8月19日03時30分発行